

8. 神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡の建物跡と遺物

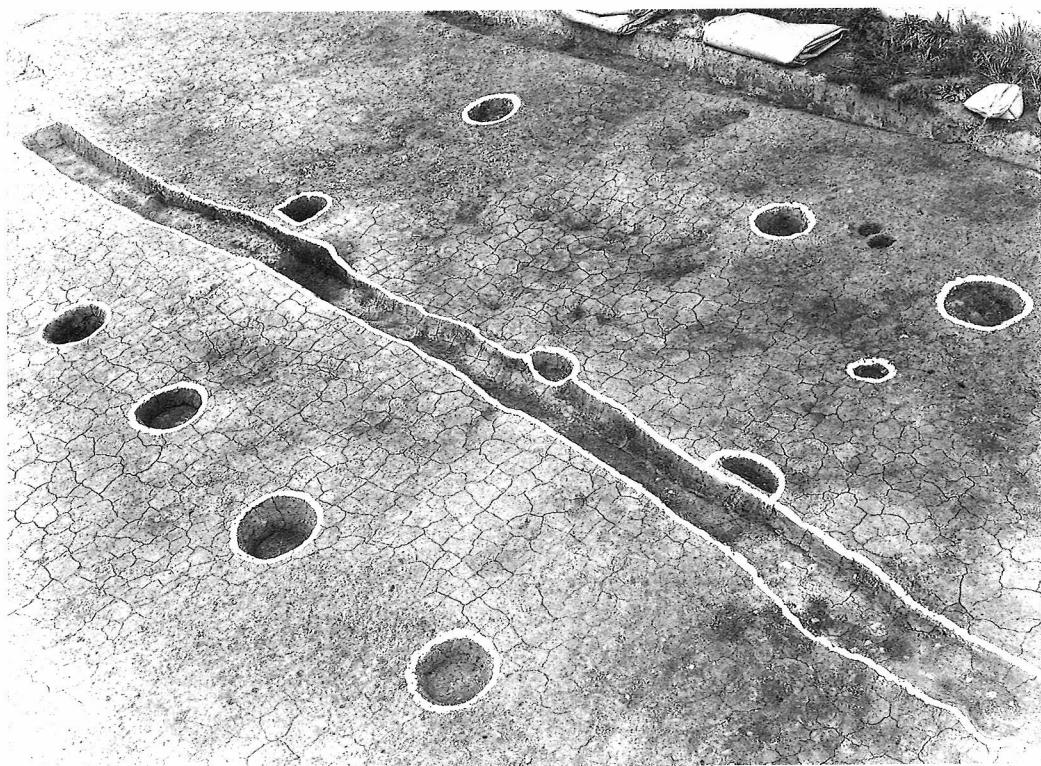
国道308号線関係の発掘調査では、神並遺跡・西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡から古墳時代中期末から後期初頭頃（5世紀後半から6世紀初頭）の遺構・遺物が多量に検出されている。神並遺跡・西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡からは、古墳時代の集落跡・谷内に築造した水利施設などの遺構や土器類をはじめとして木製品・金属製品・石製品・土製品などが多量に出土している。ここでは、水利施設や谷の概要は別稿に譲り、主に集落跡と出土遺物を取り上げることにする。

3遺跡において確認できた古墳時代の集落跡は、出土している土器類から古墳時代中期末から後期前半頃（5世紀末から6世紀前半）の時期に該当し、比較的短期間に営まれたものである。

また、古墳時代の初め頃や古墳時代後期中頃以降の遺構・遺物はほとんど認められない。このような様相は、この3遺跡と同様な位置に立地する日下遺跡・芝ヶ丘遺跡・植附遺跡・鬼塚遺跡・市尻遺跡・縄手遺跡においても看取できる。

3遺跡内には、東から西に向かって流下する谷があり、この谷に挟まれた高所に集落が展開していたものと推定できる。調査地点が、3遺跡ともこの谷筋にあたるため、建物の検出例は少ない。

次に3遺跡で検出できた同期の遺構について個別に記述していくことにする。神並遺跡では第3次・5次調査でそれぞれ1棟の掘立柱建物を検出している。第3次調査では、東西2間、



▲神並遺跡の掘立柱建物

遺跡名	調査回数	建物名	東西規模	南北規模	東西寸法	南北寸法	桁行柱間寸法	梁間柱間寸法	面積	時期	備考
鬼虎川遺跡	22次調査		2	3	6.5	3.8	2.2	1.9	24.7	5世紀末	総柱
鬼虎川遺跡	23次調査	建物1	2	2	3.48	3.48	1.74	1.74	12.1104	古墳時代中期	
鬼虎川遺跡	23次調査	建物2	2	2	2.88	2.76	1.44	1.38	7.9488	古墳時代中期	
鬼虎川遺跡	23次調査	建物1	2	2	3.96	3.72	1.98	1.86	14.7312	古墳時代後期	南面廂
鬼虎川遺跡	23次調査	建物2	2		3.24		1.62		0	古墳時代後期	
鬼虎川遺跡	8次調査	建物1	2	1+	3.7	1.6	1.9	1.6	5.92	5世紀後半	柱根・根石
鬼虎川遺跡	8次調査	建物2	2	2	3.7	3.5	1.9	1.8	12.95	5世紀後半	根石
市尻遺跡	1次調査										
市尻遺跡	1次調査										
市尻遺跡	1次調査										
芝ヶ丘遺跡	4次調査	建物1	3	3	7.5	7.5	2.5	2.5	56.25	5世紀末	柱根・根石
芝ヶ丘遺跡	5次調査	建物1		3		5.4		1.8	0	5世紀末	柱根
神並遺跡	13次調査	建物1	2	3	2.64	5.2	1.8	1.5	13.728	古墳時代中期	
神並遺跡	13次調査	建物2	2	3	5.52	4.4	2.2	1.6	24.288	古墳時代中期	
神並遺跡	3次調査	掘立柱建物1	2	3	4.5	3.79	1.5	1.8	17.055	5世紀末	総柱
神並遺跡	5次調査	建物1	3	5	5.0	8.4	1.66	1.68	42	5世紀末	
西ノ口遺跡	1次調査	SB1	3	2	5.0	4.1	1.6	2.1	20.5	6世紀前半	
西ノ口遺跡	1次調査	SB2	3	3	3.7	3.6	1.2	1.2	13.32	6世紀前半	
西ノ口遺跡	1次調査	SB3	2	3+	4.5	3.7	1.5	1.8	16.65	6世紀	
西ノ口遺跡	1次調査	SB4	3	2	3.4	3.0	1.1	1.5	10.2	6世紀	
西ノ口遺跡	1次調査	SB5	2	2	3.8	3.4	1.9	1.7	12.92	6世紀	
西岩田遺跡			2	1+	3.8	2.9	1.9	2.9	11.02	5世紀末	
西岩田遺跡			3	1+	4.85	0.65	1.6	0.65	3.1525	6世紀後半	
西岩田遺跡			2	1+	2.05	1.8	1.0	1.8	3.69	6世紀後半	
西岩田遺跡	11次調査	掘立柱建物		2		3.2		1.6	0	古墳時代後期	

▲東大阪市内検出の掘立柱建物一覧表

南北3間の総柱の建物を確認している。建物の北側約5mには、建物の梁方向とは一致しないものの東西方向にのびる溝がある。建物を構成する柱穴は、径約50cmの楕円形を呈する。第5次調査で確認している掘立柱建物は、東西3間、南北5間の大規模なものである。

鬼虎川遺跡では、5棟の建物を確認している。この内の2棟は、第23次調査で検出したものである。2棟の規模は、東西2間、南北2間で同一であるが建物方位は一致していない。建物を構成する柱穴は、径約80cmの楕円形を呈する。また、同じ調査で検出している1棟の建物は東西2間、南北2間の規模をなす。この建物の南北方向の柱列のうち中央の柱は、小型で柱列よりやや外方に突出している。また、建物の西側には、廂がある。さらに他の場所と区画するように建物の東西方向と南側には、同時期の溝が存在している。この区画の北寄り部分には、



▲出土遺物(土器類)

さらに別の建物1棟が存在する。建物を構成する柱穴は、60cm前後の楕円形を呈し、柱根の現存するものもある。また、柱穴の底面に根石を据えるものも確認している。柱根から見ると柱は円柱を用いている。第22次調査では、東西2間、南北3間の規模の総柱建物を1棟確認している。建物の北側には、建物と同一方位で東西方向に11間以上続く柵列と、これに平行してのびる溝がある。

遺物

神並遺跡・西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡の3遺跡から出土している遺物には、古墳時代中期末から6世紀前半頃の土器類をはじめ木製品・金属製品・石製品・土製品などが多量にある。しかしながら、古墳時代前期の庄内式・布留式土器は、まったく含まない。また、6世紀後半期の遺物も極めて少量出土しているにすぎない。

5世紀末から6世紀初頭頃は、朝鮮半島からの渡来人の移住によってもたらされた新たな諸技術・習慣・思想によって様々な生活用具が加わってくる。このことを3遺跡から出土している遺物によって眺めることにしよう。出土遺物の中には、生駒西麓部で製作されたものをはじめ国内の他地域で生産されたもの、朝鮮半島から直接持ち込まれたものなどが含まれている。

出土している土器類には、土師器・須恵器・韓式系土器・陶質土器・製塩土器などがある。これらの内、最も出土量の多いのは土師器で、韓式系土器・陶質土器の出土量は、少量にすぎない。

土師器には、煮沸用の甕・甑・鍋、供膳用の杯・高杯、貯蔵用の壺などがある。出土量の多いのは、煮沸用の甕類で、次いで供膳用の高杯をあげることができる。貯蔵用の壺類は、小型のものが少量出土しているのみである。これらの器種構成は、後述する須恵器との相互関係によって成り立っており、古墳時代後期以降の容器構成上での土師器の位置付けを決定するものである。胎土から見て生駒西麓産のものや他地域の製品も出土している。ほか甕類には、法量的な分化が認められる。体部は長胴化しており、この時期から普遍化してくる竈との対応を考えることができる。体部外面は、ハケメやナデ調整で仕上げる。内面調整には、ハケメ調整・ナデ調整やヘラケズリ調整があり、前者の手法が主体となっている。甑・鍋は、この時期に出現するもので、体部側面に牛角状の把手がつく。このような形態は、国内の土器からの系譜を遡ることはできず、その起源を朝鮮半島に求めることができる。また、大型の甑の出現は、これまでの加熱調理の中に、本格的な「蒸す」調理法の採用という調理上での大きな変革と捉えることができる。しかしながら、その出土量は、あまり目立つものではないことから、「蒸す」調理法は、その対象素材、2次加工工程、使用状況について今後さらに把握していく必要がある。高杯や杯には、法量が同一規格で赤褐色の色調を呈し、器体に黒斑の認められないものが多数ある。



▲ 鑄造鉄斧

須恵器は、杯・蓋・高杯・器台・壺・甕・鍋などの供膳用、貯蔵用の器種が認められる。土師器に比べると、その出土量は少ない。杯類は、個人用の食器と考えられており、これまでの容器の性格には存在していなかったもので、前述した土師器の甑とともに新たな食生活の開始を端的に示すものである。

陶質土器は、体部外面に平行タタキメと格子目タタキがあり、さらにその上に圈線が巡っている。

韓式系土器には、煮沸用の甕類・甑・鍋・移動式竈・平底鉢などの器形がある。器体外面には、平行・格子・縄蓆文のタタキメを残す。

タタキメは、格子のものが最も多い。胎土からみて、生駒西麓で製作されたもののほかに他地域産の製品もある。

製塩土器は、倒卵形を呈する薄いつくりで、



▲盾持人物埴輪

器体外面をナデ調整するものや平行タタキメを残すものがある。出土量は、前者が圧倒的に多い。すべて他地域産の製品である。

土器以外の土製品として埴輪や紡錘車などがある。

埴輪には、盾をもった人物埴輪が2点出土している。2点とも大きさ・形態・製作手法が極めて近似している。紡錘車は、土師質で側面形が算盤玉形を呈する。同形態のものは、古墳時代中期はじめ頃までにはなく、須恵器が日本で採用されはじめる時期に限って存在する。国内では、市内の鬼塚遺跡・大阪府陶邑深田遺跡・香川県宮山窯・福岡県池の上墳墓群などに見られるとともに、朝鮮半島にもその類例がある。

金属製品の主な出土遺物としては、鑄造鉄斧・小型素文鏡がある。鑄造鉄斧は、朝鮮半島や北九州から中国・四国地方の古墳や祭祀遺跡から出土することは知られていたが、畿内の集落内から出土する例のほとんどない遺物であり注目する必要がある。

また、金属製品に関連するものとして韃羽口・鉄滓・炉壁などの鍛冶関連遺物をあげることができる。これらの遺物は、極めて微量出土しているのみであるが、集落内に小規模ながら鍛冶工房の存在していたことを示している。

石製品には、滑石製の双孔円板・勾玉・剣形などがある。未製品は全く確認されていない。木製品の中にも石製品同様の祭祀関連遺物がある。

以上のように、神並遺跡・西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡の3遺跡で確認できた古墳時代中期末から後期初頭頃の遺構・遺物について概観してきた。今回の調査では、古墳時代の集落の空間的な広がりを十分捉えることはできなかったものの、その一端を検出した遺構・遺物から垣間見ることができた。

即ち、弥生時代後期以降、集落の存在していなかった3遺跡に古墳時代中期末頃、突然集落が形成され、様々な消費・生産活動を展開する。しかし、検出できた遺構に重複関係がないことや出土遺物から見て明らかなように、集落は短期間で廃絶する。このような集落の消長は、生駒西麓部に立地する同期の他遺跡でも同様の現象が認められる。

集落は、東から西へ連なる谷筋によって大きく区分されていたものと推定できる。検出できた建物が少数であることから、集落の中心は谷筋を挟んだ北側と南側に想定することができる。

集落内には、柵や溝で区画された掘立柱建物や倉が存在する。竪穴住居や井戸は、まったく確認できていない。

祭祀に関連すると考えられている石製品・木製品・製鉄関連の遺物が出土していることから集落内では、祭祀行為や小規模な鍛冶が行なわれていたことが判明した。また、後述するように谷内から浄水を得るための大規模な水利遺構が検出されていることから、何らかの生産活動ないしは祭祀行為が展開されていたことも推測できる。

先述した出土遺物からみて、3遺跡の居住者の中には、朝鮮半島からの渡来者ないしはこれに極めて強い関係をもつものが含まれていたものとも考えることもできる。 (中西)